

和歌山大学生における職業興味の特徴に関する研究

A study for the students' characteristics of vocational preference in Wakayama university

佐藤 史人

Fumito SATO

和歌山大学教育学部

小林 由佳

Yuka KOBAYASHI

元和歌山大学経済学部

キャリア・デザイン・オフィス

2008年10月3日受理

Abstract

The purpose of this study is to clarify the students' characteristics of vocational preference in Wakayama university. We have a general education class "Shinro to Syokugyo" as vocational guidance and career education. In this class we tried to investigate on the job preferences of students by VPI (Vocational Inventory Preference) Test. To analyze the results of this test lead to get suggestion for the contents and methods of career education in our university. It is necessary to construct the theory and practice of career education for the realization of students' Vocational hope.

Key word : career education vocational preference vocational guidance

はじめに

和歌山大学では、全学低学年向けキャリア教育として「進路と職業」(共通教育科目・選択：後期2単位)を2005年度より実施している。本研究では、この講義を受講した和歌山大学生がもつ職業興味について、2006年度の講義中に実施したVPI職業興味検査の結果から検討し、その特徴を明らかにすることを目的としている。

1. 和歌山大学の概要

2006年度の和歌山大学は経済学部・教育学部・システム工学部の3学部により構成されていた。旧制からの伝統をもつ経済学部は主に金融・証券・商社・製造などの産業界に、教育学部は和歌山県・大阪府の小・中学校の教職に、システム工学部は主に情報通信・IT関連企業に人材を輩出してきており、地方大学としてこれまで一定程度の役割を果たしてきた。

2. 和歌山大学生の進学動機・理由

学生は、自らの個性・適性・能力などを生かせるような卒業後の進路選択・決定を自主的・自立的にできるわけではない。とりわけ低学年においては、学部・学科の専門教育が本格的には始まっておらず、具体的な進路先を大学生活と結びつけて考えることは難しい。こうした状況に加え、進学動機・理由について見てみれば、和歌山大学固有の事情や特性が見られ、進路選択・決定に影響していることが伺われる。

これまでの「進路と職業」では、全14回のうち2回

を「自己分析」の機会として講義を設定しており、その項目のひとつとして「和歌山への進学動機・理由」を取り上げている。その結果を以下に示す(複数回答を可とした)。

- ①国立大学
- ②大卒は就職に有利
- ③自分の学力に合っている(肯定的評価)
- ④自分の学力に合っている(否定的評価)
- ⑤保護者の希望(経済的理由)
- ⑥保護者の希望(上記以外の理由)
- ⑦他者からの推薦
- ⑧興味ある分野が学べる
- ⑨将来就きたい職業に関連する事が学べる
- ⑩自宅から通学が可能
- ⑪一人暮らしがしたい
- ⑫条件(環境・施設・少人数制等)がよい
- ⑬その他

表1：進学動機・理由

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	計
経 済	45	11	24	30	2	3	12	35	7	36	11	5	28	249
教 育	5	1	8	4	1	1	2	10	8	10	0	1	9	60
シス工	28	6	25	18	6	0	5	44	13	24	4	9	19	201
合 計	78	18	57	52	9	4	19	89	28	70	15	15	56	510

和大学生全体としては、①②にあるように学歴・学校歴を重視していることがわかる。⑤⑩では高等教育機関が少ないという和歌山県の事情が反映している。最も多い動機・理由は、自分の学力との関係、つまり受験時の成績によって、良くも悪くも和大を選択していることである。その一方で、⑧⑨にみられるように、学部・学科の専門的教育内容に着目していることも動機・理由としては多いといえる。

学部別の特徴を見てみると、経済学部では①⑧⑩が多く、とくに③④の学力では否定的評価のほうが多く、他学部と相違がある。教育学部は全体傾向とほぼ一致するが、⑧⑨⑩が多いことは地元の教員を志向していることとの一致を伺わせる。システム工学部では⑧学部・学科の学習内容の特殊性に着目していることがわかる。その一方で⑨はそれほど多くはなく、将来の仕事に結びつけるよりも当面自分がしたいことを実現することを優先するためと考えられる。

3. VPI職業興味検査の活用

VPI職業興味検査は、就職指導やガイダンスの場面などで広く使われ、自己理解のツールとしても利用できる。また、手引きの付録にも掲載されている通り、専攻や性別により各尺度の得点に違いがみられ、学部による傾向や特性を把握することが可能である。

和歌山大学には経済学部、教育学部、システム工学部の3学部が存在し(2006年度現在)、学生の卒業後の進路はそれぞれの学部の専門性に基づいた特徴を示している²⁾。各学部特有の専門教育を受ける前段階の1・2年生を対象とし、彼らの職業に関する興味を正確に把握することは、全学のキャリア教育にとってその内容や方法を確立する上で必要な作業といえる。

そこで、2006年度「進路と職業」では第11回(12月13日)にVPI職業興味検査(第3版)を実施した。講義受講者で同検査を受験した学生の結果のうち、欠損値のないものを有効回答とみなした。有効回答が得られたのは和歌山大学に在籍する1回生から4回生の学生で、経済学部97名(男子51名、女子46名)、教育学部18名(男子8名、女子10名)、システム工学部76名(男子63名、女子13名)合計191人(男子計122名、女子計69名)であった。今回はこれを分析対象とした。

各受講者は、検査の回答方法、回答終了後の結果整理法を解説する講師の指示に沿って、各自回答、結果のプロフィールを作成した。その後結果を回収し、VPI職業興味検査の各尺度における得点値の学生の所属学部や性別による差異について検討した。分析に当たっては、各尺度の得点を従属変数とし、学部と性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。

4. 検査の結果

(1)興味領域尺度の結果

興味領域尺度には、R：現実的興味領域、I：研究的興味領域、A：芸術的興味領域、S：社会的興味領域、E：企業の興味領域、C：習慣的興味領域の6つの尺度がある。興味領域尺度の平均値と標準偏差を表2に示す。

R、I、A、S、E、Cの6尺度については、S(社会的興味領域尺度)のみに交互作用が見られた。

各学部・男女別に和歌山大学学生の得点平均値と『VPI職業興味検査の手引』(以下、単に「手引き」とする。)巻末付録の「各尺度における専攻別男女平均値と標準偏差」とを比較すれば、以下のような特徴が認められる。

経済学部男女ともE尺度、C尺度の値以外は全体的に低めであった。教育学部男子はS尺度、E尺度は若干高め、その他は平均並みであった。教育学部女子は全ての尺度において全体的に低めであった。そしてシステム工学部男子はR尺度は若干高め、それ以外は平均並みであった。システム工学部女子は全ての尺度において全体的に低めであった。

(2)傾向尺度の結果

傾向尺度には、Co：自己統制傾向、Mf：男性－女性傾向、St：地位志向傾向、Inf：希有反応傾向、Ac：順従反応傾向の5つの尺度がある。傾向尺度の平均値と標準偏差を表3に示す。

Co、Mf、St、Inf、Acの5尺度については、交互作用は見られなかった。

各学部・男女別に和歌山大学学生の得点平均値を興味領域尺度と同様に比較すれば、以下のような特徴が認められる。

経済学部男子は平均値の際だった相違がなく、目立った特徴は認められない。経済学部女子はInf尺度が若干高めであった。教育学部男子はInf尺度が若干高めであった。教育学部女子はInf尺度が若干高め、Ac尺度が若干低めであった。システム工学部男子は平均値の際だった相違がなく、目立った特徴は認められない。システム工学部女子はInf尺度が若干高め、Stがかなり低めであった。

(3)各興味領域尺度の分析結果

以下ではそれぞれの興味領域尺度に関して学部・男女によって統計学的な有意差を検証した。

Rにおいては、学部($F(2, 186) = 21.33, p < .01$)と性別($F(1, 186) = 4.29, p < .01$)ともに主効果に有意差がみられた。学部の各水準間において、Bonferroni法を用いた多重分析を行ったところ、経済学部とシステム工学部、教育学部とシステム工学部で有意差がみられた(ともに $p < .01$)。つまり経済学部＝教育学部<システム工学部という、文系学部と理系学部でも差がみられ³⁾、性別でも男子>女子に差がみられた結果とな

った。

Iにおいては、学部・性別いずれも主効果、交互作用ともに有意差はみられなかった。またAにおいても、学部・性別いずれも主効果、交互作用ともに有意差はみられなかった。

Sにおいては、学部($F(2,186)=9.40, p<.01$)と交互作用($F(2,186)=5.13, p<.01$)に有意差がみられた。

Eにおいては、学部($F(2,186)=6.03, p<.01$)のみ主効果に有意差がみられた。学部の各水準間において、Bonferroni法を用いた多重分析を行ったところ、経済学部とシステム工学部で有意差がみられた($p<.01$)。つまり、経済学部＝教育学部＜システム工学部ということがいえる。

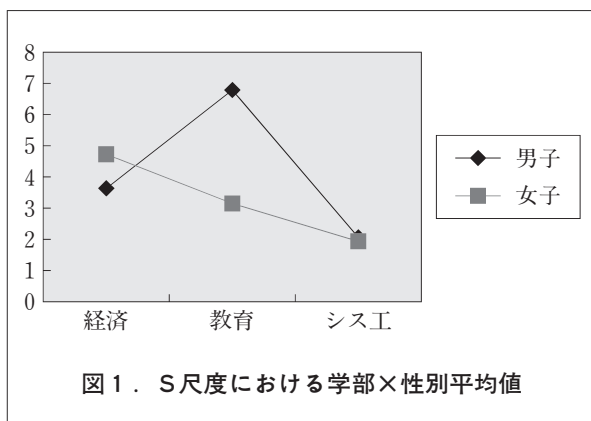
Cにおいては、学部($F(2,186)=15.80, p<.01$)のみ主効果に有意差がみられた。学部の各水準間において、Bonferroni法を用いた多重分析を行ったところ、経済学部と教育学部、経済学部とシステム工学部で有意差がみられた(ともに $p<.01$)。つまり経済学部＞教育学部＝システム工学部と読み取れる。

以上をまとめれば次のようになる。

I(研究的)、A(芸術的)尺度は性別・学部による差はなく、個人の興味・価値観による差である。E(企業的)、C(慣習的)尺度においては学部による有意差が認められる。また、E(企業的)、C(慣習的)尺度においても学部による有意差が認められる。R(現実的)、S(社会的)尺度においては学部・性別いずれにおいても有意差が認められる。

(4) S 社会的興味領域の検定

S尺度において交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った。



①学部の単純主効果

性別ごとに、学部の要因において1要因分散分析を行った。男子学生における学部の単純主効果の検定結果では、($F(2,119)=12.31, p<.01$)で有意差がみられた。次いで、女子学生における学部の単純主効果の検定結果では、($F(2,67)=3.70, p<.05$)で有意差が

みられた。

上記2つの検定で有意差がみられたため、それぞれの平均値対の差の検定を実施するためBonferroni法を用いた多重比較を行った。その結果、男性において多重比較を行った結果、経済学部と教育学部($p<.01$)、経済学部とシステム工学部($p<.01$)、教育学部とシステム工学部($p<.01$)の全てにおいて有意差がみられた。したがって、男子の学部におけるS尺度の得点差は、教育学部＞経済学部＞システム工学部の順となる。

また、女子において多重比較を行った結果、経済学部とシステム工学部($p<.05$)のみ有意差がみられた。したがって、女子の学部におけるS尺度の得点差は、経済学部＝教育学部＞システム工学部の順となる。

②性別の単純主効果

①と同様に、性別の要因を中心として学部の要因との関係を見るため学部ごとに、性別の要因において1要因分散分析を行った。

経済学部における性別の単純主効果の検定結果では、有意な差はみられなかった。教育学部における性別の単純主効果の検定結果では、($F(1,17)=13.34, p<.01$)で有意差がみられた。システム工学部における性別の単純主効果の検定結果では、有意な差はみられなかった。

経済学部、教育学部、システム工学部の各水準において、性別による得点差がみられたのは教育学部のみであった。以上の結果から、S尺度(社会的興味領域)については、教育学部の男子が最も高い平均得点を出していたことがわかる。

(5)各傾向尺度の分析結果

以下ではそれぞれの傾向尺度に関して学部・男女によって統計学的な有意差を検証した。

Coにおいては、学部($F(2,186)=3.20, p<.05$)と性別($F(1,186)=3.99, p<.05$)ともに主効果に有意差がみられた。学部の各水準間において、Bonferroni法を用いた多重比較を行ったところ、経済学部とシステム工学部($p<.01$)、教育学部とシステム工学部($p<.05$)で有意差がみられた。

Mfにおいては、性別($F(1,186)=12.60, p<.01$)のみ主効果に有意差がみられた。

Stにおいては、学部($F(2,186)=6.65, p<.01$)と性別($F(1,186)=12.92, p<.01$)ともに主効果に有意差がみられた。学部の各水準間において、Bonferroni法を用いた多重比較を行ったところ、有意差は見られなかった。しかしLSD法を用いて多重比較を行った結果、教育学部とシステム工学部($p<.05$)で有意差がみられた。

Infにおいては、学部・性別いずれも主効果、交互作

用ともに有意差はみられなかった。Acにおいても、学部・性別いずれも主効果、交互作用ともに有意差はみられなかった。

以上をまとめれば次のようになる。

Inf(稀有反応)、Ac(黙従反応)尺度については、性別・学部による差はない。つまり個人の興味・価値観による差のみであった。Mf(男性－女性傾向)尺度については、性別による有意差が認められる。Co(自己統制傾向)、St(地位志向傾向)尺度においては、性別・学部いずれもの要因において有意差が認められる。

5. 検査結果の考察

(1) 興味領域尺度の考察

R尺度の結果を見ると、文系学部と理系学部あるいは男子と女性で差が見られた。R尺度は「機械や物を対象とする具体的で実際の仕事や活動」に対する好みや興味を示しており、これは学部の特性に関わる特徴を示している。つまり学部の専門性を担保する学術分野の特性を反映しているといえよう。

I尺度とA尺度については、学部・性別ともに差が見られなかった。これについては、I尺度は、「手引」に掲載されている平均値と比較してみても、和歌山大生の得点は全体的に低かった。I尺度に関連する職領域の主なものには学者や研究者などが挙げられる。和歌山大学のこれまでの進路実績に照らし合わせてみると、これらの進路に進む学生は少数であり、全体的に興味・関心は高くない結果となったと考えられる。和歌山大学各学部の教育目的には研究職養成は第一義ではなく、学生自身も研究職への興味・関心が顕著には起きないことや研究職に関する知識や情報も十分ではないためなど、その理由は確定できない。しかし、進路選択のひとつとしての大学院進学の原因を調査し、あわせて検討することで新たな発見が期待できる。

教育学部芸術系の専攻(音楽・美術・体育など)の一部の学生にとって、A尺度が高いことはむしろ当然のことである。彼らはそれぞれの分野の芸術・技能を深めることこそが入学の動機である。従って、彼らは教育学部所属ではあっても教員等への興味・関心は低く、A尺度に関連する美術・音楽・スポーツ等に関連する職業への関心が高い。

S尺度については、教育学部の男子が最も高い得点となっている。しかし、「手引」の各尺度における専攻別男女別平均値と標準偏差をみると、S尺度については全体的に女性のほうが高いことが読み取れる。今回の調査では、教育学部の学生の有効データが他学部比べて少なめであったため、これが和歌山大学の教育学部の傾向であるとは断言できないが、教育学部の男子学生は、やはり教員志望あるいは教育関連の職業への志向を持って入学してきている者が他学部比べて多いことを示唆していると言えよう。

これまで我が国では公務員や教員は一般的に身分や待遇に男女差別が現れにくい職業として存在してきた。従って、女子学生が職業人として自立するためにはこれらの職業を選択することが不可欠であり、VPI職業興味検査で示されるS尺度の傾向とは異なる側面をもつ。とりわけ和歌山県の産業構造や労働環境では、その他の職業で女性が職業的自立を果たすのは困難である。ところが、和歌山大学においてキャリア・カウンセリングに携わった際に、女子学生の中には就職は一時的なものあるいは結婚した後は主婦になるという選択肢も依然として存在していることが実感された。こうした女性学生の考え方に相対する形で、男性学生は「卒業後は働かなければならない」という意識を持っている者が多数である。こうした和歌山大学生固有の職業観や意識が特徴的な結果に結びついているのかもしれない。

経済学部のC尺度が他の2学部と比べても高いのは、和歌山大学の学部別就職先と照らし合わせてもその傾向に一致が見られる。経済学部の学生は、男女ともに金融機関への就職率が高く、特にここ数年は卒業者の3割～4割を占めている。本講座の受講学生は低年次の者が多いが、おそらくクラブ・サークル・ゼミの先輩などから進路に関する情報や知識を取り入れ、明確な目標の有無に関わらず、「金融業界」への就職が意識の中にすり込まれると考えられる。

(2) 傾向尺度の考察

Co尺度については、学部、性別ともに有意差が認められた。学生の様子について「最近では女子学生の方が男子学生よりも落ち着いてしっかりしている」という感想が教職員からもよく聴かれる。こうした感想や実感を裏付けする一つの数値的結果が出たといえるかもしれない。

Mf尺度に関しては学部による差は認められず、性別による差のみが認められた。男性－女性傾向という尺度の名の通り、伝統的な性別役割に同調し、それを意識した仕事に関心を持っているのが和歌山大学の学生の特徴といえる。

St尺度については、まず分析結果の部分で、分散分析によって学部により有意差が見られたにも拘わらず、Bonferroni法を用いた多重比較では有意差は見出せなかった。そのため方法をLSD法に変え、多重比較を行ったところ有意差がみられた。これは、統計方法の特性からLSD法はBonferroni法よりも有意差が出やすく、この理由からくる相違であると推測される。システム工学部でこの値が低いことから推測すると、システム工学部の学生は、他の学部生に比べて「自分の専攻しているものを仕事に生かしたい」と考えている学生が多いことが指摘できる。このことは前回の研究結果と一意している⁴⁾。

これに関連して大久保幸夫は、ビジネス界では大まかに分けて三つのキャリアコースが存在すると指摘する⁵⁾。この大久保の分類に従って考えると、システム工学部の学生は専攻が学部で学んだ内容をより生かせる“エキスパート型プロフェッショナル”を夢見る者が多く、従って“ビジネスリーダー型”のように経営に関わるプロ、つまり地位や権力を握っていく立ち位置までには、彼らの関心は高くないと分析できるかもしれない。こうした個々の分析については今後の取り組みとしたい。

まとめ

和大生の職業興味の全体傾向は顕著な特徴を示すものではなく、いわゆる普通の地方大学の学生のそれといえる。しかし、所属学部別にみれば興味の内実は異なっており、他大学と比べて顕著な項目もある。加えて進学動機・理由や地域性・立地条件など和大固有の問題とも関連して、一律・一様なキャリア教育ではそれぞれの学生の興味に十分対応できないことが示唆された。さらに職業興味の特徴を分析することによって、大学におけるキャリア教育の理念・内容・方法等の改善を目指したい。その結果を「進路と職業」において具体化することが今後の課題となる。

表１．興味領域尺度における平均値と標準偏差

	経済学部			教育学部			システム工学部		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
R	1.84(2.30)	1.50(2.12)	1.68(2.23)	2.88(2.85)	0.50(0.66)	1.47(2.32)	5.81(4.06)	4.77(3.98)	5.63(4.10)
I	2.35(2.61)	2.26(3.00)	2.31(2.82)	4.00(3.74)	1.64(2.42)	2.63(3.35)	3.62(3.64)	2.62(3.25)	3.45(3.62)
A	3.63(3.16)	2.39(2.85)	3.04(3.09)	4.75(5.17)	3.18(3.33)	3.84(4.39)	4.25(3.61)	4.31(3.77)	4.26(3.66)
S	3.63(2.92)	4.74(3.60)	4.16(3.33)	6.75(2.63)	3.18(1.34)	4.68(2.73)	2.18(2.37)	2.08(2.95)	2.16(2.49)
E	4.80(3.41)	5.20(3.52)	4.99(3.48)	4.25(4.82)	2.64(2.23)	3.32(3.74)	3.29(2.71)	2.77(3.40)	3.20(2.87)
C	4.43(3.43)	5.30(3.33)	4.85(3.43)	2.75(2.33)	2.27(1.96)	2.47(2.20)	2.35(2.53)	1.69(1.64)	2.24(2.43)

表２．傾向尺度における平均値と標準偏差

	経済学部			教育学部			システム工学部		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
Co	9.20(4.32)	10.11(3.82)	9.63(4.14)	8.88(4.14)	11.64(2.35)	10.47(3.60)	7.30(4.42)	8.54(3.54)	7.51(4.34)
Mf	6.04(2.52)	3.50(2.26)	4.84(2.73)	4.75(2.73)	4.00(1.28)	4.32(2.11)	5.86(2.75)	3.85(2.35)	5.51(2.81)
St	7.51(2.69)	5.67(2.84)	6.64(2.92)	8.50(2.78)	6.64(2.23)	7.42(2.71)	6.19(2.93)	3.92(2.27)	5.80(2.98)
Inf	6.73(4.30)	7.39(3.60)	7.04(4.02)	8.13(2.20)	8.00(3.16)	8.05(2.88)	5.73(3.40)	6.85(2.48)	5.92(3.31)
Ac	9.29(5.15)	9.80(5.08)	9.54(5.15)	11.38(5.12)	7.82(2.55)	9.32(4.35)	9.21(4.67)	11.31(5.50)	9.57(4.92)

注

- 1) 労働政策・研修機構「VPI職業興味検査 [第3版] 手引き」p.1 日本文化科学社 2002年
- 2) 各学部の進路実績については、拙稿「和歌山大学におけるキャリア教育と学生意識に関する研究 ―「進路と職業」受講者へのアンケート結果より―」（『和歌山大学教育学部紀要（教育科学）』第58集 109～116頁 2008年）を参照のこと。
- 3) ただし教育学部には理科や数学の専攻もあり、入学試験に課される受験教科・科目もこれらの専攻では理系のそれと同様である。
- 4) 前掲2)と同じ。
- 5) 大久保幸夫『キャリアデザイン入門 [Ⅱ] 専門力編』p.21-24 日本経済新聞出版社 2006年

【参考文献・ウェブページ】

- 1) 倉智佐一・山上暁『改訂 要説 心理統計法』（株）北大路書房 1996年
- 2) 廣瀬等・島袋恒男・井上厚「沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択と進路成熟態度との関連」『琉球大学教育学部紀要』第49号
- 3) 「中学生、高校生の職業レディネスの発達―職業レディネス・テスト標準化調査の分析を通して― 第Ⅲ部 応用分析編 第11章 高等学校における学科と職業志向性、基礎的志向性の関連の検討」労働政策研究報告書 No.87 サマリー 2007年5月10日 独立行政法人 労働政策研究・研修機構
- 4) 統計パッケージの利用と分散分析 佐々木康成
<http://osx.cc/~ys/pdf/anova3.pdf>